

授業科目名： 北東アジア研究特論（ロシア 2）			担当教員名： 佐野 晃
選択/必修： 選択	単位数： 2	セメスター： 前	開講言語： 日本語

ディプロマポリシーとの関連：

国際社会の知識 ●	政策分析能力 ●	英語コミュニケーション能力
--------------	-------------	---------------

○授業の到達目標及びテーマ

1991年以降、ロシアではソ連の社会主義体制から西側型の民主主義体制への転換が模索されてきた。しかし、政治的混乱の中で、新しい政治制度がソ連時代から継続する政治的・制度的慣行と結びついたことから、ロシア特有の政治体制が四半世紀にわたり形成されてきた。そこで本講座は、西側諸国とは異なるロシア政治の特徴について受講生の理解を深めることを目的とする。授業を通じて、ロシア政治の基本知識を身に着けることで、ロシアの政治動向をより深く判断できる力を養うことが可能となる。

○授業の概要

本講座では、ロシア独自の政治制度について、現在大きな関心を集めているウクライナ戦争を手がかりに概観する。具体的には講義の前半(第2回から第6回)においてウクライナ戦争の背景となったロシアの対外関係を扱い、後半(第7回から第14回)では戦争を遂行するロシアの国内政治を取り上げる。授業の進行については、初めに教員が各回のテーマに関する講義を行い、その後受講生からの質疑をもとに議論を行う。

○授業計画

第1回 オリエンテーション

本講義の概要を説明する。また受講生の興味関心を基に授業の進め方についても意見交換を行う。

第2回 ウクライナ戦争の概説

2022年以降、ウクライナとの戦争はロシアの政治体制や国際関係に大きな影響を与えている。本講義では、国際政治学の主要な論点を紹介しつつ、ロシアがウクライナとの開戦に至った経緯を概観する。

第3回 ロシアの安全保障観

ロシアがウクライナとの戦争を開始した要因の一つとして、NATOの東方拡大がしばしば指摘されている。本講義では、「ロシアがなぜ安全保障上、西側諸国を潜在的脅威と認識してきたのか」、また「NATOはなぜ東方拡大を進めたのか」について、冷戦後の国際環境を踏まえて概観する。

第4回 ロシアと旧ソ連諸国の関係

旧ソ連の構成国は、スラブ系のウクライナやベラルーシに加え、バルト三国、中央アジア諸国、コーカサス諸国など多岐にわたる。これらの国々の対ロシア姿勢は様々ではなく、ウクライナ戦争以降もロシアとの関係維持を重視する国もあれば、距離を取る国も存在する。本講義では、旧ソ連諸国の対ロシア政策を各国の利害関係を踏まえて解説する。

第5回 中ロ関係

ウクライナ戦争以降、西側諸国との関係が悪化するなかで、ロシアはBRICS諸国との連携強化を進めており、特に中国との関係は急速に深化している。本講義では、ソ連時代における対立と協調の歴史を含め、ロシアと中国の二国間関係を概観する。

第6回 日ロ関係

ソ連崩壊後のロシアでは、東アジアにおけるパートナーとして、中国に加えて日本との関係が重視された時期があった。日本においても、北方領土問題で対立を抱えつつ、経済分野での協力が模索されてきた。本講義では、二国間関係の歴史的背景を踏まえながら時系列で整理する。

第7回 政治コミュニケーション

ウクライナ戦争の長期化に伴い、対外関係だけでなく、ロシア国内における政治的变化も重要な論点となっている。特にロシア市民の戦争に対する認識を把握することは、戦争継続において不可欠である。本講義では、ロシア市民がウクライナ戦争に関する情報をどのように入手し、どのように受け止めているのかについて、政治コミュニケーションの視点から概観する。

第8回 プーチン政権の特徴

ロシア国内では、ウクライナ戦争や年金改革などをめぐり、市民の間に様々な不満が存在している。しかし、2000年に成立したプーチン体制は20年以上にわたり政権を維持してきた。本講義では、プーチン大統領の政治的経歴をたどりながら、長期政権が可能となった要因について考察する。

第9回 ロシアの選挙制度

戦争に関する情報統制が強化される一方で、制度上は選挙を通じた市民の政治参加が維持されている。近年の選挙ではウクライナ戦争も重要な争点の一つとなっている。本講義では、権威主義体制下におけるロシアの選挙制度の特徴を概観する。

第10回 ロシアの政治制度

ロシア議会は長年にわたりプーチン政権の強い影響下にあると指摘されているが、その一方で、体制や戦争に批判的な立場を示す政治家も存在する。本講義では、野党勢力の動向を紹介しつつ、西側諸国とは異なるロシアの政党政治の特徴を整理する。

第11回 ロシアの行政制度

ロシア政治においては、議会だけでなく官僚機構が大きな影響力を有してきた。ソ連時代には共産党官僚が統治に深く関与しており、その影響は現在の行政制度にも見られる。本講義では、中央政府を中心に、ソ連期から現代に至る行政システムの変遷を概観する。

第12回 ロシアの地方政治

ロシアの行政体制は中央集権的であり、地方自治体の裁量は限定的であるとの指摘が多い。本講義では、中央政府と地方政府の関係に注目しながら、地方行政が住民サービスにどのように対応しているのかを紹介する。

第13回 ロシアの民族地域

ロシアでは地方自治体の権限は限定されているものの、少数民族によって構成される共和国には独自の憲法や議会が認められている。本講義では、少数民族地域の歴史的背景を踏まえつつ、中央政府との関係性について解説する。

第14回 市民運動

現行のロシア政治において、市民が政治の主体として登場する場面は多いとは言えず、特にウクライナ戦争以降は、政治的発言を控える市民も少なくない。しかし、ソ連崩壊直後のロシアでは民主主義への期待が強く、90年代には草の根の政治活動が活発に展開されていた。本講義では、ソ連末期のペレストロイカおよびグラスノスチから現在のウクライナ戦争に至るまでの市民運動を紹介し、その特徴について概観する。

第15回 授業まとめ

各回で扱ったロシアの外交と内政に関する基本的な内容を振り返る。

○テキスト

授業資料については、教員が作成した pptx ファイルや動画ファイルなどの視覚教材を用いる。また追加資料として、学術論文や政府機関の文献を適宜紹介する。使用する教材は原則として日本語の資料であるが、一部英語の資料を利用する可能性がある。また本授業において、ロシア語能力は必要ない。

○参考書・参考資料等

横手慎二（2015）『ロシアの政治と外交』放送大学教育振興会

Bacon, E. 2024. Contemporary Russia. Palgrave Macmillan. ISBNs: 978-3-031-52423-3

○学生に対する評価

・授業への参加態度 20% ・ロシア内政に関するプレゼン 40% ・ロシア外交に関するプレゼン 40%

成績については、受講生がロシアの外交と内政における興味関心のあるテーマを選択し、計二回プレゼン発表を行うことで判断する。授業中の積極的な発言は授業への貢献として加点する。

○オンライン授業に切り替えた場合の授業形態

授業形態：オンライン授業（リアルタイム配信型）